



よろい  
甲を着た古墳人だより



国内初の発見、2号甲内部から骨製小札

「甲を着た古墳人」の西側から発見された2号甲の詳細調査により、甲内側から巻かれたような状態の骨製小札を発見しました。小札の列は、上段から13枚、15枚、17枚と2枚ずつ増えていることから、開いた場合、扇状になると考えられます。革紐などの痕跡は認められませんが、元のつなぎ合わされた状態をそのまま残しており、甲の一部あるいは付属具の可能性が考えられます。

古墳時代の小札は鉄製が一般的で、一部に革を用いた例もありますが、骨製は国内で初めてのことです。国外でも韓国の夢村土城（モンチョント-ソン）<sup>むそんどじょう</sup>で4世紀代の例が1例確認されているだけというきわめて珍しいものです。骨製という材質から考えると甲としての機能より、視覚的なアピールが重視されたものかもしれません。

骨製小札は、非常にもろいため、公開できる状態ではありませんが、今後はこの骨製小札がどのように用いられたのか、素材となった骨の動物種や使用部位などについて調査を進めていく予定です。



2号甲内部から発見された骨製小札



発見された時の2号甲

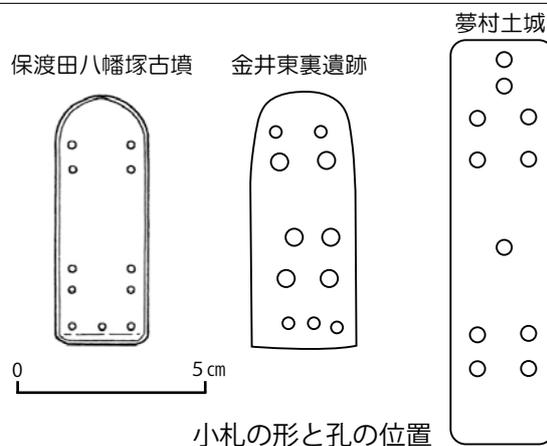
発見のきっかけはCT スキャン撮影でした。その画像から2号甲の内部に鉄以外の素材からなる製品が存在することがわかりました。甲の内側に詰まっていた火山灰を取り除いたところ短冊状の板が連続しており、それが骨製小札であることが明らかになりました。



骨製小札は、現在も写真のように重なったままの状態です。全体の形がわかる上端の小札を計測すると、長さ約 6.6 cm、幅約 3.0 cm、厚さ約 0.3 cmで、上端が丸く、下端は直線的な形態であり、直径 3～4 mm の孔が、上から2、2、2、2、3の5列、合計 11 個開けられています。



今回発見された骨製小札は、高崎市の保渡田八幡塚古墳ほたはちまんづかこふんに副葬されていた鉄製小札甲の胴体部分の小札と形、大きさ、孔の数、孔の開けられた位置がよく似ています。韓国の夢村土城の小札とは形や孔の開けられた状況が異なりますが、骨製という共通点は重要なことだと考えます。



夢村土城は、4世紀に百済の都があった場所の遺跡です。金井東裏遺跡の骨製小札は5世紀後半から6世紀初めのものですが、両者の間には何らかの人や技術の交流の歴史があったものと考えられます。今回の発見は韓国の研究者からも注目されています。これからも、この大きな謎の解明に挑戦していきたいと思っています。

